

井上円了研究序説

——妖怪博士の奇想——

連載第五回

井上円了の観光立国論(三)

中島 敬介

——明治21年の国際リゾート開発構想——

前号から持ち越した問題意識

井上円了(1858-1919、以下「円了」とも略す)は、1888年(明治21)年、政教社の機関誌『日本人』に「坐なから国を富ますの秘法」を発表し、国際観光——外国人観光客誘致——を強兵策や殖産興業策に代わる、日本の富国策とすべしと主張した。外客誘致はとりも直さず外国人の国内(内地)旅行を意味するから、鹿鳴館外交で条約改正をすすめる井上馨らと近い考えであったことになる。だが——円了も同人であった——政教社は『日本人』を通して条約改正反対の旗幟を鮮明にしていた。円了は『日本人』の創刊号で「本誌編輯人志賀君の『国粹保存旨義』に本き」と言明していた。円了の思想は、「坐なから」の時点で変質したのか。それとも当初から国粹主義的な考え方とは——少々——違っていたのだろうか。

今日、一般に「国粹主義」に関しては、自国中心(至上)の——危険な——排外思想(ショービニズム Chauvinism)と見做されがちだが、当時「国粹(保存)旨義」を奉じる人たちの主張は、少し違っていた。根底に「先進的」な西洋文明には同調したくない心情があったことは確かだが、少なくとも彼らが口にするレベルでの「国粹」は、過激な日本至上主義的国家主義(Ultra-nationalism)や日本民族中心主義(Ethnocentrism)を意味してはいなかった。「国粹」は一般的な「Nationality」の訳語として用いられ、具体的には「大和民族をして、冥々隠約の間に一種特殊」に「翹成発達せしめたる」ものを指していた。したがって日本にだけ「国粹」があると主張していたわけではなく、日本には日本固有の「Nationality」があるというところに重点が置かれていた。一方で日本の「国粹」は、「日本国土に存在する万般なる圏外物の感化と、科学的反応とに適応順従し、以て胚胎し生産し、成長し発達したるものにして、且つ大和民族の間に千古万古より遺伝し来り化醇し来」たと認識されて、「一種特殊」と重視していた。

(2) 国粹保存旨義の「日本分子」

彼らは「終に当代に至るまで保存」されてきたものを「日本分子」と呼んでいた。

「国粹(保存)旨義」(以下、単に「国粹主義」とは、その「日本分子」によって継承されてきた「日本の国粹を保存し、之を以て日本国民か、進退変応の標準となす」考え方を指す。そして、この考え方を遵奉する立場から「日本将来の大経綸は実在日本在来の旧分子を悉皆打破し、泰西の新分子を以て之と交換する」やり口、すなわち「日本分子打破」への

6. 「坐なから富国論」の思想性

(1) 政教社と『日本人』

唯、日本国内に壮大安逸の旅館を設立して外人の来遊を引く是なり。これぞ「坐ながらにして国を富ますの秘法と云ふなり」と胸を張る井上円了の評論は、1888年(明治21)から翌年にかけて、政教社の機関誌『日本人』に分載された。

政教社の設立については経緯や時期、その趣意について必ずしも明確とはいえない。ただ以下の、いわゆる「国粹(保存)旨義」を標榜する同志の組織であったことは間違いない。

大和民族が現在未来の嚮背を裁断するは、実に日本の国粹を保存し、之を以て日本国民か、進退変応の標準となすにあり

対抗姿勢を鮮明にしていたのである。

したがって——彼らの言い分によれば——遮二無二に「国粹」を絶叫しているのではなく——彼らの自覚としては——「予輩は国粹を以て進退去就の標準となせとも、力めて宇内の大勢に牴牾せず、能く正流に随ひて以て諸般の境遇に処すること、すなわち「日本を日本とし、而して後西洋学問の長所を以て其短所を補はん」という、至極真つ当なことを主張していたのである。

国粹主義とは——彼らの謂いに従えば——幕末の攘夷論に見られる排外・嫌外思想とは異なるものである。明治以降、否応なく直面することになった西洋文明を、ただ無条件に「丸呑み」することをせず、逆に問答無用と否定することもなく、「日本の伝統」を基軸として受け容れていこうとする立場、やや自己韜晦的な表現を引用すれば「採長補短的でふは折衷比較的」な立場が国粹主義なのである——彼らの主張を尊重すれば——。

本稿の文脈に関わって留意すべきは、この国粹主義に照らすと、キリスト教という西洋由来の宗教でも、優れた文化・文明を伴うならば、それは従来の日本文化を高める機能を有するのだから、仏教や神道などの在来宗教と並立させて、日本に根付くように——排除するのではなく——日本化されなければならない対象である、という点である。

彼らが国粹主義の名のもとで重点的に議論しているのは「国粹」が指示する日本文化の「サブスタンス(内実)」ではない。フォーカスされているのは、西洋文明を導入する実践的プロセス、すなわち維新以来の「文明開化」のあり方なのである。

したがって、指弾の標的は西洋の文明・文化でも西洋人でもない。西洋文明をまるごと鵜呑みに導入して、この国固有の「日本分子」を破壊しようとする日本人、すなわち明治政府とその追従者なのである。

(3) 志賀重昂の国粹保存旨義

国粹主義の考え方は、代表的イデオログとされる志賀重昂(1863-1927)の説明を借用すれば、次のように整理できる。

- ・「西洋の開化と雖も」日本に根づかないことはない、これは認める。
- ・しかし、そもそも風土気候の違うところから移植した以上、当然「園丁たる日本人」は枯死しないよう「之が保護培養」に力を尽くさなければならぬはずだ。
- ・そのためには、この地にもともと生育していた植物を一層「健全強勁」にし、これと「兼て培養」に努めることが、より容易かつ有効な方法ではないか。
- ・西洋から移植した木に、もともと日本にあったのと同様の成長を望むなど、生育土壌すなわち「日本の風土と天候とを」[...]「西洋と等一ならしめ」なければ、できるものではない。
- ・しかし、そのような大事業を、現在の我々の手で成し遂げようなどは「特に至艱至難なるを以て」、推奨できるはずがない。
- ・かりに可能だとしても「大勢力を費用する」ことなしには不可能である。

(4) 円了の「日本宗教論」

円了は『日本人』創刊号に「日本宗教論緒言」と題する評論を投じ、以後5回にわたって、仏教改良をテーマに本論(「日本宗教論」)を展開した。

あらかじめ、趣旨を整理しておく。「日本宗教論」では専ら「日本の宗教」の立場から、「異宗教」が「外から入る、」を阻止するため「仏教改良」が主張されるのだが、ここでの仏教の改良とは単に一宗教固有の問題を意味してはいない。本論における仏教は、政教社や『日本人』がテーゼとして主張する「日本人をして永く日本人たらしめん」ために、「日本人たる精神思想を存し日本人の日本人たる習慣遺伝を保たしめる」ための必須要素に他ならない。これが円了による「日本宗教論」の本旨であり、したがって「日本宗教論」とは円了による「日本(人)論」なのである。

円了は初回の「緒言」で、次のように自述する。

「両三年以来不幸にして病気に罹り一旦読書著作を廢するほどの衰弱状態にあつたが、それでも敢えて論攷の執筆投稿を決意したのは、政教社「創業の一人に加」わつた者の責任として、「脳海の全力を竭して飽くまで『日本人』発行の旨趣を称揚し」、国民の「悉く同意同賛の意を表せしめんことを熱望」したからである。

文字通りに受け取れば、円了は政教社創設者の責任から、まさに不惜身命の思いで、一般社会への国粹主義普及のために筆を執つたことになる。その悲愴な決意のもとで選ばれたテーマが宗教、内実は「仏教改良」であった。では、国粹主義と宗教——なかならず仏教改良——とは、どの

・それよりも西洋の開化(文化・文明)を「転用して日本の国粹を能ふ丈け及ぶ丈成長発育せしむるのは太だ経済的」なのである。

現状の国力を考えれば、西洋文明をそのまま移入するのではなく、これを日本化して導入し、国粹たる「日本分子」の保護育成に充てるべき。これが——このような西洋文明是認の姿勢が、果たして彼らの活動実態に見合うものであつたかどうかは分からないが、少なくとも——国粹主義者の主張であつた。

そもそも彼らの『国粹保存』の「大旨義」は、「彼の踏舞、仮装舞踏会」等の「鹿鳴館」に代表される表面的な欧化主義など、相手にしてはいなかつた。しかし「日本在来の旧分子を悉皆打破し、泰西の新分子を以て之と交換する」ものを「日本分子打破説」として非難するのと同様に、「虚飾是れ本領とする壮宏華麗なる建築物を新造し、[...]「踏舞を勉強し、仮装舞会を奨励するてふ策略」を「塗抹旨義」と呼んで真つ向から否定する以上、結果として、井上馨らの——迎合的で国辱的な——開化政策による条約改正には、断固として反対の立場とならざるを得なかつた。

これが国粹主義を標榜する政教社同人の基本スタンスであり、機関紙『日本人』の思想基調であつた。

円了は、そのような政教社を創設した中心メンバー——「政教社」という組織の名付け親とされる——であり、初期『日本人』の主要執筆者の一人であつた。

ようにつながるのか。円了には、明治20年前後のこの国のありように関わる、憂慮すべき二つの現状認識があつた。

第一の憂いは、国粹主義者と共通する、日本全体の性急かつ手放しの西洋化である。

日本人をして其形を西洋にし其色を西洋にし其耳目を西洋にし其脳髓を西洋にし其の風俗宗教言語文章坐作進退に至るまで悉く之を西洋なさしめば
と、円了は西洋を連打して、次のように痛罵した。

其人已に日本人にあらず其国已に日本国にあらざるへし

では、なぜ日本が日本でなくなるような危篤的事態に陥つたのか、円了は視線を反転させ「日本(人)」に向き直る。

「日本人の日本人たる所以のもの之を分析するに[...]「宗教其一に居るのみならず其諸成分中の主元素なるや疑を容れ」ない。さらには、古来日本の宗教は「儒仏神の三教」あるものの、就中「多数の人民を薫染し多数の思想を占領し其影響量も重大なるものは独り仏教」である。「故に仏教は日本人の日本人たる主元素中の主元素」であり、「仏教を護持拡張するは即ち日本人をして日本人たらしめ日本人をして独立対抗せしめる要法」に他ならない。

今度は「日本(人)」を連呼して、この国における宗教とりわけ日本人の精神に根差した仏教の重要性を強調する。この立論に沿って「異宗教(キリスト教)」の浸入を防ぐための「仏教改良」が主張される。ここでの仏教の改良とは、単に一宗教固有の問題ではなく、政教社や『日本人』が

テーゼとして主張する、「日本人をして永く日本人たらしめん」ために、「日本人たる精神思想を存し日本人の日本人たる習慣遺伝を保たしめる」ための必須要素に他ならないのである。これが円了による「日本宗教論」の本旨であった。

この国の憂うるべき第二の状況は、仏教界の不甲斐なきであった。

「仏教の仏教たる全流は独り日本」にしか見られず、かつ「其原理よく哲理の寸尺に合し其立論より智者の度量に適する」にも関わらず、「今日の事情耶蘇教は旭日將に天に昇らんとするの勢あり仏教は残月將に光を失はんと」している。

円了は仏教界（僧侶たち）に奮起を促し、異教の国内侵入を阻止するばかりか、反転攻勢によって全地球を仏教化せよと檄を飛ばす。

現在十万の僧侶をして悉く志を立て力を致して各一日に一人を化せしむるときは二十八年間には全く一地球をして仏教国となさしむべき道理にあらずや

円了によれば、これは机上空論的な比喩ではない。「此僧侶をして奮然其志を立て其力を致さしむるには亦必ず然るべき方法なかるへからず」と言葉をつなぎ、次のように「緒言」を結んだ。

是より号を追ふて僧侶活用仏教改良の方法を論せんと欲するなり

しかし、この約束は——少なくとも『日本人』誌上においては——果たされなかった。前稿で述べたように「日本宗教論」は、「坐ながら国を富ますの秘法」に置き換えられて中絶したからだ。だが、決して「僧侶活用仏教改良の方法」を論じる暇（いとま）がなかったわけではない。

『仏教活論序論』どころか、それ以前の『真理金針』以来、円了が叫び続けてきたことだった。したがって『仏教活論序論』もその実質内容は『真理金針』の後追いに過ぎないから、「日本宗教論」では、従来と同じ内容の繰り返し予告されていたことになる。本論「(其一)」でも、「読者若し其一二節を読み直ちに批評を下すときは、或は此論の真に愛国の表情に出つるや否を疑ふ者あるべし、故に余か読者に切に望む所は全論を讀下して後公平の批評を与へられんことを」と言い、さらに「余が〔…〕別して仏教を主眼として論ずる〔…〕其理由は本論の結末に至りて見るへし」と、事前に結論が用意されていることを明言している。

だが、「本論の結末」が従来どおりに確定しているなら、なぜ紙数だけを費やして、僧侶の墮落や仏教頹廢などの周縁をうろつき、一丁目一番地の「仏教改良」の本丸に切り込むことをしなかったのか。

本論「(其一)」の冒頭に、次の——喉に刺さる小骨のような——一文が置かれている。

余が日本宗教論は全く国家の独立、即ち本誌編輯人志賀君の所謂『国粹保存旨義』に本たる者

円了は国粹主義を標榜する政教社の創設メンバーで、『日本人』はその政教社の機関紙である。円了の評論が「志賀君の所謂『国粹保存旨義』」に基づくことに不思議はない。だが「日本宗教論」が前提とするキリスト教否定は、国粹主義の主張に従った内容と言えるのだろうか。国粹主義すなわち「国粹（保存）旨義」に照らせば、キリスト教は「異宗教」という理由や、仏教の教義に「劣る」という理由では、排除できない対象はずだ。

「日本宗教論」は1888年（明治21）年4月（『日本人』第1号）の「緒言」に続き、本論は9月の第12号まで、5回にわたって連載された。相当なボリュームが費やされながら、具体的な「僧侶」の活用も「仏教改良」の方法についても言及されなかった。終始一貫、有形無形の日本の事物がごとく西洋化していくことへの怨嗟混じりの懸念と憂い、そして日本人の精神的バックボーンである仏教改良の「必要性」——だけ——で埋め尽くされた。つまり「緒言」で提起された問題意識と批判対象とが重畳的に反復され、詳細にわたって——水平的に——拡張されていくだけなのだ。

「日本宗教論」は、なぜ核心に向かって——立体的に——組み上がった行かなかったのか。

(5) 躊躇いがちな「宗教論」

「日本宗教論」の批判の矛先は、まず仏教界（僧侶）の頹落に向けられ、これが「僧侶活用仏教改良の方案」に直結して、「仏教改良」の目的である異教の浸入阻止へと「本論」が展開されていくのだが、「緒言」に奇妙な記述が見られる。

余嘗て仏教活論を著し其序論中に〔…〕仏教は学理に合し開明に適する古今不二東西無比の法にして他日耶蘇教に代りて宗教界の占領するもの亦此仏教に外ならざるべし

「日本宗教論」の議論は、前年の『仏教活論序論』で決着済みだと告げている。

引用に見られるア・プリオリの耶蘇教（異教であるキリスト教）否定は

円了が右記一文で挙げた「本誌編輯人志賀君」すなわち志賀重昂は、「日本国裡の基督教」については、日本の教団関係者や教団経営を厳しく批判する一方で、逆に「基督教を輸入せんことを奨説」さえしていた。キリスト教の日本化は可能であり、かつ「日本の開化」にとつて有意義だと考えていたからだろう。これが国粹主義の基本姿勢だとすれば、円了の「日本宗教論」は、「志賀君の所謂『国粹保存旨義』本づく」ものではなくない。それどころか国粹主義に真つ向から対立する内容といえるだろう。国粹主義に基づけば、最も重要かつ先行すべきはア・プリオリのキリスト教否定はもちろん、教義の検証の前に、キリスト教が「西洋の優れた文化・文明を伴う」ものであるかどうか、そして日本文化を高める機能を有するか否かの論証がなされなければならない。打ち明けて言えば、『真理金針』から『仏教活論序論』に引き継がれた円了のキリスト教批判に、決定的に欠落していたのが、まさにその観点であった。

円了は「日本宗教論」を展開しなかったのではなく、日本宗教論のロジックでは「国家の独立」を論じることができなかったのである——「所謂『国粹保存旨義』に本」づく限りにおいては——。つまり、円了の思想は、政教社結成の初期段階から国粹主義に——完全には——同調していなかったのだ。では、どこがどのように違っていたのか。

(6) 志賀の「分子」と円了の「らしさ」

志賀らの国粹主義には、日本的要素——「日本分子」——が実体物として存在していた。国粹主義では、日本的な「方法」や「型」、日本化の「基準」も日本文化の内に含めるが、これら無形物にも「日本分子」が内在する。そもそも「旧分子〔…の…〕打破」・「新分子〔…〕と交換」・

「日本旧分子」の「維持」・「塗抹」の語、そして何よりも「国粹」の「保存」という発想したい、実体物の存在を前提としなければ成り立たない。日本分子なくして、国粹（保存）主義は、語り得ないのである。

一方、円了の「日本宗教論」には「日本人の日本人たる所以」との表現が使われ、「日本人をして日本たらしむる」という文言も、例えば次のようなかたちで頻出する。

仏教の維持拡張するは常に日本人をして日本人たらしむるの一助となる

留意すべきは、ここに「日本人たらしむる」実体物が想定されていないことだ。「日本人たらしむる」以前に「日本人」が存在している。「日本人の日本人たる所以」という表現にも、「日本（人）らしさ」が問われる先に「日本（人）らしさ」の可能性を持つ「日本人」が、事前に存在している。つまり、円了の「日本」とは、「日本分子」とは違い——例えば、葡萄の「種」のように——取り出せる実体を持ったものではなかったのだ。したがって、打破も交換も、それじたいの維持もできない。

では、円了の言う「日本人らしい日本人」は、どのようにして形成されるのか。日本人たらしめる実体物（「日本分子」）が存在しない以上、「成る」というかたちでしか出現し得ない。他者との間——または自己の中——に、「日本（人）」としての自覚と認識が生じたとき、はじめて——日本人にのみ——可能的に立ち現れる類いのものであった。

「仏教は日本人の日本人たる主元素」との表現も、「仏教＝日本分子」とはされていない。仏教は「日本（人）らしさ」の出現可能性を開く「一助」の手段であり、その手段として実質を有するという意味で——

ゆえん」が雄大な自然や地勢、環境にあり、これが米国人の「気風」を形成したと気付いた円了は、日本人の「気風」の元も「宗教＝仏教」以上に、「富士」「山」等の「日本らしさ」にあり、日本人自らの覚醒は、日本に内在する「日本分子」といったような実体的な何かの働きによるのではなく、他者——外国人——のまなざしに逆照射されるかたちで、あるいは他者との出会いや交わりの中から「日本」が自ずと「発現」してくる、と考えるようになった。

この心境変化を同伴して、大西洋の船上同乗していた「友人」の言葉に刺激され、「宗教論」で展開されようとしていた円了の「日本（人）論」は、「観光論」として再編集されていた。観光は主体者（観光者）の「体験」によって——のみ——成立し、あらかじめ観光資源や観光商品が存在するわけではない。観光もまた——本来——人と人・事物との出会いによって偶発的に生じる体験の価値であり、その体験のあり方が円了の可能的な「日本」と一致したのである。

少なくとも円了の自覚としては「坐ながら富国論」は先行の「宗教論」とつながっていた。「日本（人）論」でなければ、「仏教を主眼として論じる」……其理由は本論の結末に至りて見るべし」と、すでに結論が用意されていたと覚しき「宗教論」を簡単に中絶させる必要はない。同一テーマの——古い評論なればこそ、「日本宗教論」は退出しなければならなかったのだ。

仏教が「日本」出現の一助となる元素として否定されたわけではないが、明治21年の外遊を契機に、円了の「日本」探索は、それまでの内面一途から、内と外とを一体化し、その表裏の合わせ目に向かったのである。換言すれば他者の視線・視角が導入されて、「日本」の元素の所在

「分子」ではなく——「元素」と表現されたのだろうか。

このあたり、政教社創設の当初段階から円了と志賀ら同人たちとの歩調に、微妙な——しかし確固とした——乖離があった理由の一つと思われる。かりに円了が国粹主義に立っていたなら、「日本分子」という明快で便利なタームを使用しなかったはずがない。この語を回避していたことが、円了と国粹主義者たちとの間に距離があった証左となるだろう。

ただし、円了自身、早い段階で国粹主義との思想の差異を明確に意識できていたわけではなかっただろう。生活経験が国内に限られていた「日本宗教論」執筆時には、その「日本（人）らしさ」を開く手段としての「元素」は、国内に求めるしかなかった。とりわけ専門領域の——したがって限界も熟知している——「仏教」に縋るしかなかった。しかし、仏教以上に有効な「元素」が見つければ、これに拘泥する理由は毫もない。円了にとって大事なのは「日本（人）らしさ」そのものであったからだ。明治21年6月ころ、円了は外遊の旅先で、「それ」を発見したのだ。「それ」が、志賀の「日本分子」のように実体物なら日本の内部になくてはならない。実体物でないからこそ、「それ」を日本の外側で発見でき、「一助」の「元素」であるからこそ、簡単に「それ」——すなわち「観光」——を仏教と置き換えることができたのである。

（7）円了渾身の「日（人）本論」

「日本宗教論」の執筆時点では、出現させる「一助」の手段を日本の「内部＝仏教」に求めていたが、初の海外旅行によって円了の視線は「外部」に向けられた。米国滞在の後半「米国の駁々として文明にすすむ

が、それまでの「個物」の内部から、個物が触れ合う「場」ないし「機会」へと次元が移ったのだ。「宗教論」で主語（主格）扱いで追究されようとしていた「宗教（仏教）」は、「観光論」に基点を移すことによって、体験価値を生む述語（方法）の一つとして再配置され、自己と他者の出会う「対象」として客体化されたのである。

その結果、「日本」は理屈や理論で教え諭すものから、体験による自覚を促すものとなり、結果として後続の「日本（人）」の探求は、「論」ではなく「秘法」の惹句で通俗化されたのである。

1888年（明治21）の最初の外遊は、円了に「国内」一途の偏狭な国粹主義と訣別させ、「宇宙主義Universalism」と表裏一体の「日本主義Nationalism」に向かわせる分岐点となった。その旅上で構想された「坐ながら富国論」、すなわち「坐ながらにして国を富ますの秘法」は、円了の思想性から見ると、そして「宗教論」を後継するものであったことを考え併せれば、円了が提起する国家経済戦略である以上に、「日本宗教論」に代わる円了——渾身の——「日本（人）論」、すなわち明治中期における日本（人）のあるべき進路を示すものであったのだ。

（以下、次号）

本稿の趣旨からは少々離れ、蛇足気味ながら、最後に次のことについて考察を加えておきたい。

円了はなぜ、志賀らの国粹主義から距離を置くようになったのか。どうやら「坐ながら」の訓(よ)みと「日本分子」が関わっているようだ。

(1) 「坐ながら」の訓みと意味

『日本書紀』「巻第三」に、神武天皇が武器を使わず「天下を居ながらに平らげる」と宣せられる場面がある。「坐平天下」と記されて「坐(い)ながら天の下を平けむ」と読み下される。「坐」の語は日常的で平和な状態を表し、戦闘・競争的な「威(いきほひて)」と対比されて用いられている。

円了が否定した政府主導の国富策——強兵・製産・貿易・出稼——は、いずれも西洋諸国との競争やアジアへの進出を不可避とする。自国内の風致文物を自国内で活用する国際観光政策だけが、平和的な「坐(い)ながらにして国を富ませる」方法であった。円了は「来遊外国人」を「一助」とした日本(人)の自覚こそ、至上の「国の富」と考えていたのだろう。

(2) 「日本分子」の跋扈

「坐ながら富国論」が、「官」中央」ではなく「民」地方」主導の展開を意図していたことに留意したい。

や皇国思想が、産み落とされたのである。

この「日本分子」は、戦前思想・行為の否定だけでは駆除できなかった。戦後もしぶとく生き残り、半世紀を経た「バブル経済」の時代、「観光」の光を観(しめ)す」論は、国策である「リゾート開発」に沸き立つ歓声で甦った。郷土破壊と濡れ手に粟の金儲けを正統(当)化するスローガンとして。

それからさらに四半世紀を経た今日もまた、国家的イベントや外客誘致政策への嬌声、そしてIRという麗句で美化された遊興賭博場——日本の伝統的な倫理用語では「悪所」——への熱望で、再びこの「怪物」は目を覚まそうとしている。

(3) 明治21年の国際リゾート開発構想

一般にリゾート(resort, resort)の語は行楽地・保養地を指し、円了の「坐ながら富国論」は、約言すれば、日本を外国人の「リゾート」として整備することだから、その意味では文字とおり、「明治21年の国際リゾート開発構想」であった。

一方、リゾートには「止むを得ず採る最後の手段」という、もう一つの意味がある。円了にとって強兵・殖産興業・海外雄飛などは、荷の重すぎる国富策に映っていたのだ。

「坐ながら富国論」は、この国の実力に見合った、円了苦肉の、明治21年のもう一つのリゾート開発構想だったのだろう。

(以上)

観光は「国策」に便乗すると変質する。その事実は、喜賓会から鉄道省国際観光局に至る、この国の戦前観光政策の「官業化」が、如実に示している。

紀元2600年を迎えた1940年(昭和15)ころ、鉄道省国際観光局は「観光資源」という——それまで使われることのなかった——奇怪な行政用語を捏造し、「観光開発」に猛(妄)進した。観光の「資源」を「開発」する、その正統性を保証したのが『易経』の「観光」の光を観(み)る」を真逆に転倒させた——意図的な——誤読、「観光」の光を観(しめ)す」という、国粹保存主義における「日本分子」のごとき「観光」実体」論に支えられていた。

国際観光局は手当たり次第に観光の「日本分子」を移植して、観光主体者不在の「観光資源」を乱開発していった。終には皇軍の戦果をも「観光」に組み入れて宣伝するに至り、ここにおいて、戦前観光政策は自壊した。

だが、これは観光(行政)分野のみに起こったことではない。この時期、芸術も思想も文化もスポーツも、宗教さえも、この国の社会要素が一齐に「日本分子」を実体化させた。国家権力の強要以前に、自ら進んで——先を競って——国策に便乗し、個々の「日本分子」を撒き散らしたのである。

この「異常現象」は、当時の皇国思想を母胎に生じたのではない。まったく逆に、国粹保存主義が民から官に担ぎ手を替えたために、そこから異常成長した「日本分子」の「鬼胎」として、極度な日本至上主義

【主要引用参考文献】

1. 井上円了「坐ながらにして国を富ますの秘法」『日本人』第16、17、20号(明治21年、政教社) 引用元・東洋大学井上円了研究会第三部会編『井上円了研究(資料集第1冊)』(1981)
2. 井上円了「日本宗教論」『日本人』第1、4、6、7、8、12号(同上) 引用元・同上
3. 井上円了『欧米各国政教日記上篇』(1889) 哲学書院
4. 志賀富士男編『志賀重昂全集 第壹巻』(1928) 志賀重昂全集刊行会



なかじま けいすけ
奈良県立大学ユーラシア研究センター特任准教授/副センター長。主な著作として、『勅語玄義』に見る奇妙なナショナリズム』東洋大学井上円了研究センター編『論集 井上円了』(2019)教育評論社、「地域経営の視点から見た『平城遷都一三〇〇年祭』」『都市問題研究』第60巻11号(2008)、「もう一つの観光資源論」『日本観光研究学会研究発表論文集 No.29』(2014)、「井上円了の国家構想」『東洋大学井上円了研究センター年報 vol.26』(2018)、「南貞助論—日本の近代観光政策を発明した男」『日本観光研究学会研究発表論文集 No.34』(2019)など